林彪反党集団の社会的基礎について

姚　文　元

林彪反党集団の社会的基礎について

姚　文　元

外文出版社
北京

毛主席のことば

レーニンはなぜブルジョア階級にたいして独裁をおこなうといったのか、この問題をはっきりさせなければならない。この問題をはっきりさせなければ、修正主義に変わってしまう。全国に理解させなければならない。

毛主席のことば

いまわが国でおこなわれているのは商品制度であり、賃金制度も不平等で、八級賃金制が存在している、などなど。これらはプロレタリア階級独裁のもとで制限を加えるほかはない。だから、林彪のたぐいが登場すれば、資本主義制度を実行するのはきわめて容易である。したがって、マルクス・レーニン主義の著作を、もっと読むようにしなければならない。

林彪反党集団の社会的基礎について

姚文元

毛主席は、プロレタリア階級がブルジョア階級にたいして独裁をおこなう問題をはっきりさせなければならない、と語ったさい、「**林彪のたぐいが登場すれば、資本主義制度を実行するのはきわめて容易である。したがって、マルクス・レーニン主義の著作を、もっと読むようにしなければならない**」と明確に指摘した。このことは、「林彪のたぐい」の階級的本質はなにか、林彪反党集団を生みだした社会的基礎はなにか、というきわめて重要な問題を提起している。この問題をはっきりさせることは、プロレタリア階級独裁をうち固め、資本主義の復活を防ぐうえで、また、社会主義の歴史的段階における党の基本路

線を断固として実行し、ブルジョア階級が存在することもできなければ、再び発生することもできないような条件を一歩一歩つくりだすうえで、疑いもなく、きわめて必要なことである。

すべての修正主義者、修正主義の思潮と同じように、林彪とその修正主義路線は、偶然の現象ではない。林彪とその一味は、全党、全軍、全国人民のあいだで極度に孤立していたが、これらの極度に孤立した、「天馬、空を行き」、「独り往き、独り来る」といった人物があらわれたことには、その深い社会的階級的基礎がある。

林彪反党集団が打倒された地主・ブルジョア階級の利益を代表し、打倒された反動派の、プロレタリア階級独裁をくつがえし、ブルジョア階級独裁を復活させようとする願いを代表していたこと、この点は比較的はっきりしている。林彪反党集団はプロレタリア文化大革命に反対し、わが国のプロレタリア階級独裁の社会主義制度を心の底から憎み、これを「封建的専制」とひぼうし、

「現代における秦の始皇帝」とののしった。かれらは、地主分子、富農分子、反革命分子、悪質分子、右派分子に「政治的、経済的に真の解放をかちとらせ」ようとした。つまり、政治的、経済的に、プロレタリア階級独裁を地主・買弁ブルジョア階級独裁に変え、社会主義制度を資本主義制度に変えようとしたのである。必死に復活をはかるブルジョア階級の党内における代理人、林彪反党集団の、党とプロレタリア階級独裁にたいする攻撃は、狂暴をきわめるにいたり、最後には特務組織をつくり、反革命武装クーデターを画策するところまでつっぱしった。こうした狂暴性は、国家権力と生産手段を失った反動派がその失った搾取階級の陣地を奪い返すためには、あらん限りの手段に訴えるものだ、ということを示している。われわれは、林彪が政治的、思想的に破たんしたあと、まるで命知らずのバクチ打ちのように、プロレタリア階級を「ひと呑みにしてしまおう」と、いちかばちかの賭けをこころみ、はては、国を裏切って敵に身を投じたこと、毛主席、党中央が林彪にたいしてひじょうに辛抱づ

よい教育をほどこし、時間をあたえ、救いの手をさしのべたことも、かれの反革命の本性をみじんも変え得なかったことを目にしている。これらすべては、プロレタリア階級独裁のもとでの、プロレタリア階級とブルジョア階級という二大敵対階級の命がけの闘争を反映しており、こうした闘争は、ひじょうに長い期間にわたってつづくであろう。打倒された反動階級が存在するかぎり、党内（および社会）には、復活の願いを復活の行動に変えるブルジョア階級の代表者があらわれる可能性がある。したがって、警戒心を高め、内外の反動派のさまざまな陰謀を警戒し、粉砕しなければならず、けっして油断してはならない。しかし、こうした認識では、まだ事物の全部を認識したとはいえない。林彪反党集団は、打倒された地主・ブルジョア階級の復活の願いを代表しているばかりでなく、社会主義社会のなかで新しく生まれたブルジョア分子の権力奪取の願いをも代表している。かれらは、新しく生まれたブルジョア分子のいくつかの特徴をそなえており、そのうちの一部のものは、それ自身、新しく生ま

れたブルジョア分子である。かれらのとなえる一部のスローガンは、ブルジョア分子と、資本主義の道を歩もうとするものの、資本主義を発展させる必要に応えたものであり、これを反映したものである。われわれが一歩すすんで分析をくわえる必要があるのは、まさにあとの側面である。

毛主席はつぎのように指摘している。「**レーニンは『小生産は資本主義とブルジョア階級を、たえず、毎日、毎時間、自然発生的に、大規模に生みだしている』とのべている。労働者階級の一部、党員の一部にも、このような状況が存在している。プロレタリア階級のなかにも、機関の工作要員のなかにも、ブルジョア的生活作風にそまるものがいる**」、と。林彪反党集団中の一部の人物は、このような新しく生まれたブルジョア階級と資本主義の代表者にほかならない。そのうちの、例えば林立果①とその小「艦隊」②は、まぎれもなく、社

① 林彪の長男
② 林彪反党集団の特務組織

会主義社会のなかで生まれた反社会主義のブルジョア分子であり、反革命分子である。

ブルジョア階級の影響の存在、国際帝国主義、修正主義の影響の存在が、新しいブルジョア分子を生みだす政治的、思想的根源である。そして、ブルジョア的権利の存在が、新しいブルジョア分子を生みだす重要な経済的基礎である。

レーニンはつぎのように指摘している。「共産主義社会の第一段階（これが普通には社会主義と呼ばれている）では、『ブルジョア的権利』は、完全に廃棄されるのではなく、部分的にだけ、すでに達成された経済的変革の度合に応じてだけ、すなわち生産手段にかんしてだけ、廃棄されるのである。」「しかし、このブルジョア的権利は、その他の面では、社会の成員のあいだの生産物の分配と労働分配の規制者（決定者）として、やはりのこっている。『働かざるものは食うべからず』――この社会主義的原則は、すでに実現されている。『等しい量の労働に等しい量の生産物を』――この社会主義的原則もまたすでに実現されている。だが、これはまだ共産主義ではない。そして、これはまだ、不平等な人間の不等（事実上不等の）量の労働にたいして、等しい量の生産物をあたえる『ブルジョア的権利』を除去していない。」

毛主席もつぎのように指摘している。「中国は社会主義国家に属する。解放前は資本主義とほぼ同じであった。いまでも八級賃金制、労働に応じる分配、貨幣による交換がおこなわれている。これらは旧社会と大して変わらない。異なっているのは所有制が変わったことである。」「いまわが国でおこなわれているのは商品制度であり、賃金制度も不平等で、八級賃金制が存在している、などなど。これらはプロレタリア階級独裁のもとで制限を加えるほかはない。」

社会主義社会にはまだ、全人民的所有制と集団的所有制という二種類の社会主義所有制が存在しており、このことが、いまわが国でおこなわれているのは商品制度であるということを決定づけているのである。レーニンと毛主席の分析はいずれも、社会主義制度のもとでの分配と交換の面に、不可避的に存在して

いるブルジョア的権利にたいしては、プロレタリア階級独裁のもとでこれに制限を加えるべきであり、それによって長期にわたる社会主義革命の過程で、しだいに三大差異を縮小し、等級的差異を縮小し、こうした差異を消滅する物質的条件と精神的条件を一歩一歩つくりだしていくべきだ、ということをわれわれに教えている。そうではなくて、逆に、ブルジョア的権利およびそれによってもたらされる一部分の不平等を強固にし、拡大し、強化しようとするなら、必然的に両極への分化という現象が生まれてくるであろう。つまり、少数のものが分配の面である種の合法的なルートや多くの不法なルートを通じて、ますます多くの商品や貨幣を占有し、こうした「物質による刺激」で誘発される金もうけ、名利追求といった資本主義思想がはんらんし、公のものを私物化し、投機売買、汚職腐敗、窃盗賄賂などの現象が多くなり、資本主義の商品交換の原則が政治生活、はては党内生活にまで侵入してきて、社会主義の計画経済を瓦解させることになり、また商品と貨幣を資本に転化させ、労働力を商品にす

るという資本主義的搾取行為が発生し、修正主義路線を実行する一部の部門と単位では、所有制の性質が変わり、勤労人民を抑圧し搾取する状態が再びあらわれることになるであろう。その結果、党員、労働者、富裕な農民、国家機関の工作要員のなかから、プロレタリア階級と勤労人民を完全に裏切る少数の新しいブルジョア分子、成り上がり者が生まれてくる。労働者の同志が、「ブルジョア的権利を制限しなければ、ブルジョア的権利が社会主義の発展をさまたげ、資本主義の発展を助長する」といっているが、まったくその通りである。経済面でのブルジョア階級の力がある程度まで増大してくると、その代理人は、政治面の支配を要求し、プロレタリア階級独裁と社会主義制度の転覆を要求し、社会主義的所有制の全面的変更を要求し、公然と資本主義制度を復活し発展させるようになる。そして、新しいブルジョア階級が政権の座につくと、なによりもまず人民に血なまぐさい弾圧をくわえ、思想・文化諸領域をふくむ上部構造で資本主義を復活させ、つづいて、資本と権力の大小に応じて分配を

おこない、「労働に応じて分配する」は形だけのものとなり、生産手段を独占したひとにぎりの新しいブルジョア分子が同時に消費財やその他の製品の分配権を独占してしまう。――これこそ、今日、ソ連ですでに発生している復活の過程なのである。

林彪反党集団が、どのように、手段をえらばず富をかき集めたか、どのように、飽くことなくブルジョア的生活様式を追求したか、どのように、ブルジョア的権利を利用して自分のために、明るみには出せない陰険で、醜悪な、さまざまの悪事を働いたかについては、多くの事実が、すでに暴露され、批判されている。しかし、よりはっきりと問題を説明できるのは、反革命クーデター計画の『「五七一工程」紀要』である。この計画のなかで、林彪反党集団が各階級のなかの一部のものを扇動、挑発してプロレタリア階級独裁に反対させるのに利用したのは、ほかでもなく、まさにブルジョア的権利の思想であった。いいかえれば、この計画に代表される階級的利益は、古いブルジョア階級の利益

をのぞけば、まさに一部の新しいブルジョア分子、およびブルジョア的権利を利用して資本主義を発展させようとする少数のものの利益であった。したがって、それは攻撃のほこ先を毛主席のプロレタリア革命路線に向けているし、また、わが国のプロレタリア階級独裁のもとで社会主義革命を通じて、ブルジョア的権利にたいし加えられているある種の制限をとりわけ憎悪しているのである。

国家機関の幹部が五・七幹部学校に参加することは、林彪反党集団によって「形を変えた失業」とひぼうされ、機構を簡素化し、大衆に近づくことは、幹部に打撃をあたえるものとして攻撃されている。かれらにしてみれば、幹部は人民の頭上にあぐらをかくおえら方でなければならず、集団的生産労働にひとたび参加すれば、「失業」したことになる。これは、国家機関の工作要員のなかの、ブルジョア的権利を拡大し、おえら方になろうとする、ブルジョア的生活作風にすっかり染まった一部のものを挑発して、党の路線に反対させ、社会

主義制度に反対させようとするものである。

知識分子が労働者、農民と結びつき、農山村に赴くことは、林彪反党集団によって「形を変えた労働改造にひとしい」とひぼうされている。共産主義的自覚をもった多くの青年たちが、生気にあふれてつぎつぎと農村に赴いていることは、三大差異を縮小し、ブルジョア的権利を制限するうえで深遠な意義をもつ偉大な事業であり、すべての革命的な人びとはこれを熱情こめてたたえているが、ブルジョア思想にむしばまれたもの、とりわけブルジョア的権利の思想に縛られたものは、これに反対している。知識青年と労働者、農民との結合を堅持することができるかどうかは、大学の教育革命が、学生を労働者、農民のなかから募集するだけでなく、労働者、農民のなかにもどらせるという上海工作機械工場の道を堅持することができるかどうかに直接つながるものである。林彪反党集団がこれをとりわけ憎悪したのは、かれらが勤労人民と対立していたことを示すだけでなく、かれらがブルジョア的権利を利用して党に攻撃をか

け、ブルジョア的権利の思想の影響を比較的深くうけていた一部のものを扇動して社会主義革命に反対させようとしたことをも暴露している。かれらの綱領は、都市と農村の間、頭脳労働と肉体労働の間の差異を拡大し、知識青年を新しい貴族階層に変え、それによってブルジョア的権利の思想の影響を比較的深くうけている一部のものにかれらの反革命クーデターを支持させようとするものであった。

労働者階級が共産主義精神を発揚し、修正主義の「物質による刺激」を批判することは、林彪反党集団によって「形をかえた搾取をうけている」とひぼうされている。林彪は「物質による刺激」の熱狂的な鼓吹者であった。かれはその反革命のメモのなかに、「物質による刺激はやはり必要だ」、「唯物論——物質による刺激」、「官、禄、徳をもって誘う」といった修正主義の黒いことばを自ら書きのこしている。林彪反党集団のある主要なメンバーも反革命のメモのなかに、「労働に応じる分配と物質的利益の原則」は生産を発展させる

「決定的な原動力」であると書いている。かれらは表面的にはカネで労働者を「刺激」することを主張したが、実際には労働者の等級的差異を際限なく拡大し、労働者階級のなかからプロレタリア階級独裁にそむきプロレタリア階級の利益にもそむく少数の特殊階層を育成、買収して、労働者階級の団結を切りくずそうとした。また、ブルジョア階級の世界観で労働者をむしばむと同時に、労働者階級のなかの、ブルジョア的権利の思想の影響を比較的深くうけていた少数のものを、かれらのプロレタリア階級独裁反対を支持する力のひとつにしようとしたのである。林彪一味は「賃金」で「青年労働者」を誘惑することに「とりわけ」注意を払った。いわゆる「官、禄、徳をもって誘う」は、かれらの陰謀術策にほかならない。このことは逆の面からつぎのことをわれわれに教えている。つまり、青年労働者とくに幹部になった青年労働者は、かならずブルジョア階級の物質による誘惑やさまざまなブルジョア的権利の思想によるへつらいを自覚的にしりぞけなければならず、プロレタリア階級と全人類の完全

解放をめざして英雄的に奮闘するという共産主義の革命精神を保持、発揚し、マルクス・レーニン主義の世界観で自分を武装することにつとめなければならず、けっして商品や貨幣による交換、世俗的なへつらい、阿諛追従、セクト主義といった七色の世界に魂をうばわれて、林彪のたぐいの政治的ペテン師や世上の地主・ブルジョア分子のワナにかからないようにしなければならない、と。かれらは「思いやり」という名目で、実際には青年労働者を「刺激」して資本主義の道を歩ませようとしているのであり、政治的な一種の「教唆犯」といえよう。経験のとぼしい、新しく生まれたブルジョア分子が、表で法律に違反し、紀律をみだし、老かいな古いブルジョア分子が裏で糸をひき、悪知恵をいれる。これは、今日の社会における階級闘争のなかでつねに見られる現象である。われわれは、むしばまれた青少年犯罪者の処理にあたって、裏から糸をひいている教唆犯に重点的に打撃をあたえているが、この方針は堅持していかなければならない。現実の闘争のなかで、ブルジョア階級の腐食と、旗幟を鮮

明にして闘っている青年労働者が、すでに数多くあらわれている。われわれはかれらを支持し、その闘争経験を総括しなければならない。

林彪反党集団はまた、農民は「衣食に困っている」とか、解放軍幹部の「生活水準は低下している」などとひぼうし、文化大革命のなかでブルジョア階級を批判した紅衛兵の、あの大胆に考え、大胆に発言し、大胆に突進し、大胆に行動し、大胆に革命をおこなう精神を「利用されたのだ」とひぼうしている。……これらすべては、社会主義制度と党の大衆路線を根底から否定し、ブルジョア階級にたいするプロレタリア階級の独裁を根底から否定して、ブルジョア的権利を拡大し、資本主義を復活させようとするものにほかならなかった。農民は「衣食に困っている」などとひぼうしたかれらのねらいは、農民を扇動して「ありったけ食べてしまい、ありったけ分けてしまう」ようにさせて、社会主義の集団経済を瓦解、解消させることにある。もしこの路線どおりに事をすすめていたなら、少数のものが新しいブルジョア階級になりあがり、圧倒的多

数の人たちが資本主義の搾取をうけるという結果をもたらしたであろう。これこそ、地主、富農および農村のなかの、資本主義の道を歩む一部の富裕中農が待ちのぞんでいる事態である。

いまとなれば、われわれは林彪のいう「真の社会主義を建設する」とは、どのようなしろものであるかを見てとることができる。それはつまり、社会主義の看板をかかげてブルジョア的権利を拡大し、新しいブルジョア分子および資本主義の道を歩もうとする一部の派別、集団が、打倒された地主・ブルジョア階級と結託し、「いっさいを指揮し、いっさいを動員し」、プロレタリア階級独裁をくつがえし、資本主義を復活するようにさせることである。林彪のたぐいの人物こそ、かれらの政治的代表である。林彪反党集団が『「五七一工程」紀要』で提起したこれらの綱領は、天から降ってきたものでもなければ、「超天才」をもって自任していたかれらの頭のなかに始めからあったものでもなく、社会的存在の反映である。的確にいえば、かれらはそのブルジョア階級の

反動的立場から出発して、総人口の数パーセントを占めるにすぎない、改造されていない地主分子、富農分子、反革命分子、悪質分子、右派分子の要求を反映し、少数の新しいブルジョア分子と、ブルジョア的権利を利用して新しいブルジョア分子になりあがろうとしているものの要求を反映していたのであり、社会主義の道を堅持する総人口の九〇パーセント以上を占める革命的人民の要求に反対していたのである。かれらは観念論的先験論で唯物論的反映論に反対した。しかし、かれら自身の反革命思想の形成は、唯物論的反映論で説明しなければならない。

なぜ、林彪のたぐいが登場すれば、資本主義制度を実行するのはきわめて容易であるのか。それは、われわれの社会主義社会には、まだ階級と階級闘争が存在しており、資本主義が生まれる土壌と条件が存在しているからである。こうした土壌と条件をしだいに減らしていき、最後にこれを絶滅してしまうためには、プロレタリア階級独裁のもとでの継続革命を堅持しなければならない。

これは、毛主席の革命路線に導かれたプロレタリア階級の前衛がなん世代にもわたり、堅忍不抜の努力を重ねてはじめて完遂することのできる任務である。そのためには、党の基本路線を堅持し、労働者階級の政治的自覚を高め、労農同盟をうち固め、団結できるすべての力を団結させるとともに、広はんな革命的大衆を結集し指導して、階級敵との闘争および三大革命運動の実践のなかで、自分の世界観を自覚的に改造しなければならない。また、社会主義の全人民的所有制と勤労大衆の集団的所有制を強固にし、発展させ、所有制の面ですでに廃絶されたブルジョア的権利の復活を防ぎ、ひきつづき比較的長い時間をかけて、所有制改造の面でまだ完遂されていない部分の任務をしだいに完遂していかなければならず、生産関係の他の二つの面、つまり人と人との相互関係と分配関係の面で、ブルジョア的権利を制限し、ブルジョア的権利の思想を批判し、資本主義が生まれる基盤をたえず弱めていかなければならない。さらにまた、上部構造の領域における革命をあくまでおしすすめ、深くほりさげて修

正主義を批判し、ブルジョア階級を批判し、ブルジョア階級にたいするプロレタリア階級の全面的独裁を実現しなければならない。

毛主席は一九七一年の八月から九月にかけて各地を視察したさいの談話で、つぎのようにのべている。「われわれはインターナショナルを五十年間歌ってきたが、わが党には、分裂をはかるものが十回もでた。わたしの見るところでは、これからも十回、二十回、三十回とでてくるであろう。きみたちは信じるだろうか。きみたちが信じなくてもわたしは信じる。共産主義になったら闘争がなくなるというのか。わたしはそんなことは信じない。共産主義になってもまだ闘争はあり、ただそれは、新しいものと古いもの、正しいものと誤ったものとの闘争になるだけである。数万年後も、誤ったものはやはり駄目であり、通らないものである」、と。レーニンもつぎのようにのべている。「そうだ、われわれは地主とブルジョア階級をうち倒して道を掃ききよめはしたが、まだ社会主義の建物をうちたてたわけではない。そして、ふるい世代を一掃した土

壌のうえには、歴史的にたえず新しい世代が現われてくる。なぜなら、この土壌は数多くのブルジョアを過去に生み出したし、現在も生み出しているからである。そして、資本家にたいする勝利を、小所有者が見るように見ているものは、『かれらはボロ儲けした、こんどはおれの番だ』といっている。こういう人間はみな、ブルジョアの新しい世代の源ではないか」、と。レーニンがいっているのは社会の階級闘争の長期性であり、毛主席がいっているのは、こうした闘争が党内に反映して生まれた二つの路線の闘争の長期性である。われわれは、こうした階級闘争と路線闘争を通じて、ブルジョア階級とその代表者の、修正主義をおしすすめ、分裂をはかり、陰謀術策をめぐらす行動にたえずうち勝っていかなければならない。そうしてはじめて、ブルジョア階級が存在することもできなければ、再び発生することもできないような条件を一歩一歩つくりだし、最後に階級を絶滅することができるのであり、これこそプロレタリア階級独裁の全歴史的時代に完成すべき偉大な事業なのである。

ブルジョア思想による腐食とブルジョア的権利の存在によって生みだされた新しいブルジョア分子は、普通、二面派、成り上がり者という政治的特徴をもっている。かれらは、プロレタリア階級独裁のもとで、資本主義的活動をおこなうため、つねになんらかの社会主義の看板をかかげるものである。かれらの復活活動は、失った生産手段を奪い返すのではなく、これまで占有したことのない生産手段を奪い取ろうとするものであり、したがってことのほか貪欲にふるまい、全国人民の所有または集団所有の富をできれば一気に呑みこんで、私有制にしようとする。林彪反党集団はこうした政治的特徴をそなえている。「かれは中山の狼のようだ。思いをとげれば、キバをむき出す」。これは、「相手しだいで手口を変え」しかも野蛮で悪らつな孫紹祖を描いた、『紅楼夢』のなかの詩だが、これをそのまま林彪反党集団に贈るのは、大変ふさわしいことである。林彪は「志を得る」までは、つまり一部の政治、経済の権力を握るまでは、反革命二面派の手口を用いて党をあざむき、大衆をあざむき、ま

た、大衆運動の力を利用して自分の目的に奉仕させた。そのためには、かれは革命的な看板をかかげたり、革命的なスローガンを叫んだりすると同時に、これをねじまげることさえやってのけたのである。毛主席は文化大革命の初期に書いた一通の手紙のなかで、林彪一味の内的世界を分析して、**「わたしの推測では、鬼を討つために鍾馗①の力を借りるというのがかれらの本心である」**と指摘しているが、これはこうした現象をみごとに解明している。「力を借りる」ことは、扉をたたくためのレンガ、つまり手づるにすぎない。かれらは目的を遂げたあとは、この「助け」を必要としなくなり、つぎは手のひらを返して凶暴にこの「助け」を葬り去ろうとしたのである。反革命二面派にせよ、赤旗をかかげて赤旗に反対するにせよ、「面とむかってはお世辞をふりまき、背後では毒手を下す」にせよ、または、林彪反党集団自身の供述――「毛主席の旗をかかげて、毛主席の勢力に打撃をあたえる」にせよ、すべて言葉こそちがえ同

① 鍾馗とは、伝説中の魔よけの神

じやり方なのである。林彪反党集団は、かれら自身が描きだしたように、「数年の準備を経て、思想的、組織的、軍事的水準が、いずれも相当に高まり、一定の思想的物質的基礎ができた」と自ら考えたとき、キバをむき出しはじめた。かれらはその支配し、牛耳っていた単位や部門で社会主義の共有制を林彪反党集団の私有制に変え、その政治的野心をますます露骨にさらけだした。こうした野心は、かれらが「志を得る」度合に応じてふくれあがっていった。それは、ブルジョア階級が資本の蓄積にともなってますます貪欲になっていくのとまったく同じように、どこまでも止まることを知らないものであった。マルクスは、ブルジョア階級を分析したさい、「**資本家としては、かれは人格化された資本にすぎない。かれの魂は資本の魂である**」とのべている。ブルジョア階級の党内における代理人としての林彪の魂もまた、すでに打倒されたがなお復活の夢をすてない古株のブルジョア階級、現に生まれつつあり、しかも支配をたくらむ新しいブルジョア階級の魂にすぎない。階級的に分析すれば、林彪一

味の時代逆行の反革命的政治活動の根源は、きわめて明らかである。かれらが孔孟の道を鼓吹し、党を裏切り、中国人民を裏切って、社会帝国主義に身を寄せたことは、孔子を崇拝し、国を売る中国の買弁ブルジョア階級がやったことと同じである。かれらが狂気のように反革命クーデターを画策したことも、世界の多くの国々のブルジョア階級がこれまで数えきれないほど使い、いまなお使っている手口をくりかえしたものにすぎない。

われわれの任務は、一方では、ブルジョア階級と資本主義を生みだす土壌をしだいに減らしていくことであり、他方では、林彪のたぐいの新しいブルジョア階級が生まれたときに、または生まれつつあるときに、時を移さずかれらを見わけることができるようにしておくことである。マルクス主義・レーニン主義・毛沢東思想を学習することの重要性は、ここにある。マルクス主義の導きを離れては、以上二つの面の任務を完遂することはできない。それどころか、修正主義の思潮があらわれたとき、自分にブルジョア的権利の思想があるた

め、または見わけることができないために、まんまとだまされたり、はてはうかうかと賊の船に乗ってしまう。そうでなければ、なぜ、修正主義路線があらわれたとき、それについていくものがでるのであろうか。なぜ、林彪一味が党の九期二中総で観念論を利用してさわぎ立て、人をだますことができたのであろうか。なぜ、党を分裂させ、プロレタリア階級独裁をくつがえそうとした林彪反党集団の、あの露骨な言論が、少数の幹部のあいだに市場を見出すことができたのであろうか。なぜ、大、小「艦隊」があからさまにご馳走をしたり、物を贈ったり、地位をあたえるなどという手口を、勢力拡大、セクト結成、陰謀画策の手段にすることができたのであろうか。なぜ、かれらの反革命のメモにあるように「技術で政治をおおいかくす」といったたぐいのことを、その反革命活動の戦術にしたのであろうか。ここには深い教訓がある。一九五九年、彭徳懐反党集団に反対したとき、毛主席は「**現在、主な危険は経験主義である**」と指摘した。だから、われわれはまじめに本を読まなければならない。こ

の十数年らい、毛主席はこの意見をなん度もくりかえしてのべている。毛主席は、党の高級、中級の幹部、誰よりもまず中央委員がみな、「**それぞれ程度に応じて真剣に本を読んで学習し、マルクス主義に通じるようにしなければならない**」と強調し、また、「**ここ何年かは、マルクス・レーニン主義の宣伝にとくに注意を払うべきである**」と強調している。林彪反党集団が崩壊したあと、毛主席は再び、「**わたしはここであらためて同志たちに本を読むようすすめる**」とのべ、最近、プロレタリア階級独裁についてふれたさい、このことをいま一度強調した。これらのあたたかい、ねんごろな教えは、われわれにどれほど深い感銘をあたえていることであろう。全党の同志、とくに高級幹部は、かならずこの事柄をプロレタリア階級独裁の強化にかかわる大きな事柄としてつかまなければならない。そして、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンと毛主席の、プロレタリア階級独裁にかんする論述と主要な著作にたいしては、なによりもまず自分でよく学び、はっきりさせ、理論と実践の結合の角度

から問題を説明するようつとめ、思想と行動の面で、大衆から遊離したブルジョア階級の思想作風をとりのぞき、大衆と一体になるようつとめ、社会主義の新しい事物の真の促進派となり、資本主義の侵食を見分けることに長じ、敢然とそれに抵抗しなければならない。わが党が数十年にわたってつちかってきた刻苦奮闘の栄えある伝統は、かならず発揚し、うけついでいかなければならない。状況を明らかにし、経済政策を含めた諸政策を研究しなければならない。革命に力を入れて、生産を促し、仕事を促し、戦争への備えを促すこと――これは実際に効果をあげており、今後も堅持していかなければならない。性質の異なった二種類の矛盾を区別することに注意を払い、極少数の悪質分子には、的確で力強い打撃をあたえ、大衆のあいだにある資本主義の影響には、「**団結――批判――団結**」の公式にもとづき、主として学習と自覚を高めるという方法、資本主義にだんこ抵抗する先進的な事物を支持するという方法、昔を思いおこし今とくらべるという方法、説得、教育、批判と自己批判の方法によって

解決し、幹部と大衆の九五パーセントを団結させるようにしなければならない。資本主義的傾向を批判するにあたっては、世論を喚起し、多数を獲得し、自覚を促し、積極的に導いていかなければならない。資本主義のどろ沼に深くおちこんだ極少数のものにたいしては、「同志、早く目覚めよ」と一喝しなければならない。

われわれはこの論文の冒頭で、林彪反党集団は全国人民のあいだで極度に孤立していた、と指摘した。また、それが発生した階級的根源を分析するために、林彪反党集団を生んだ土壌と条件を指摘した。この側面をのべたあと、われわれは、林彪反党集団が本質的にはひじょうにぜい弱であり、すべての反動派と同様、ハリコの虎にすぎないことをさらに指摘しておかなければならない。林彪反党集団のすべての反革命活動は勝利の記録ではなく、敗北と行き詰りの記録にすぎない。社会主義制度は、かならず資本主義制度にとってかわり、共産主義は、かならず全世界で勝利する。これは、人間の意志によっては

左右することのできない客観的法則である。社会主義社会は、古い社会の母胎から生まれてきたものであり、「**したがって、それはあらゆる面で、経済的にも、道徳的にも、精神的にも、それが生まれ出てきた母胎たる旧社会の母斑をまだおびている**」。これはなにも不思議なことではない。二十五年らいの歴史がわれわれに教えているように、われわれがプロレタリア階級独裁を堅持し、プロレタリア階級独裁のもとでの継続革命にかんする毛主席の学説を堅持し、毛主席がわれわれのために定めた社会主義革命の路線、方針、政策を堅持しさえすれば、階級敵の反抗を粉砕し、一歩一歩これらの母斑を減らし、たえず新たな勝利をおさめることができるであろう。今日、われわれの社会主義事業は活気みなぎり、日に日に発展するすばらしい情勢にかこまれており、それは帝国主義、社会帝国主義が内部の四分五裂状態になやまされ、内外ともに行き詰っているのとあざやかな対照をなしている。今回、毛主席が理論問題を提起したことは、理論と実践の面からプロレタリア階級独裁の歴史的任務とこれらの

任務完遂の方法をわれわれにいっそうはっきりと認識させ、大いにプロレタリア階級独裁の強化を促し、社会主義革命の深化と社会主義建設の発展を促し、全国の安定・団結を促すにちがいない。中国の共産主義者は確信をもっており、中国のプロレタリア階級と革命的人民は確信をもっている。そして、いま、共産党の指導のもとに、一致団結し、意気込みにもえて、修正主義反対・修正主義防止の闘争に身を投じている。中国革命の歴史は、革命的人民が紆余曲折した闘争を経て勝利に向かった歴史であり、反動派が度かさなる対決を経て滅亡に向かった歴史でもある。毛主席が総括しているように、「**中国では、一九一一年に皇帝が打倒されてから、反動派が権力の座に長くついていたためしはなかった。いちばん長かったもの（蔣介石）でも二十年にすぎず、人民がひとたび造反に立ちあがると、かれも倒れた。蔣介石は孫中山のかれにたいする信用を利用し、また、黄埔軍官学校を開設して、多数の反動派をかきあつめ、それによって身をおこした。かれが反共にふみきると、ほとんどすべての**

地主・ブルジョア階級がかれを支持した。当時、共産党には経験がなかったため、かれはほくそえんで一時的に勢力をえた。しかし、この二十年の間に、かれは一度も国家を統一したことはなかった。国共両党の戦争、国民党と各派軍閥との戦争、中日戦争、最後は四年にわたる大内戦で、かれは一群の島に逃げ込んだのである。中国で、反共右派がクーデターをおこしたならば、かれらも安泰ではありえず、短命であるにちがいない、とわたしは断言できる。なぜなら、九〇パーセント以上の人民の利益を代表するすべての革命者がそれを許すはずはないからである」。「結論は、やはりこれまでくりかえしてきた言葉――前途は光明に満ちており、道は曲りくねっているという二句につきる。」われわれは、毛主席の指し示す方向と道にそって勇躍前進しようではないか。

（『紅旗』誌一九七五年第三号より）

林彪反党集団の社会的基礎について

1975年 初版発行　　定価 50 円

出版者　外文出版社
（北京阜成門外百万莊）

発行者　中国国際書店
（北京 P. O. Box 399）

取扱店　東方書店(東京) 亞東書店(東京)
中国書店(福岡) (株)内山書店(東京)
(株)満江紅(東京) 朋友書店(京都)
(株)燎原書店(東京) 中華書店(東京)

編号：（日）3050—2636　　3—J—1361P
00015

0,40